

大型の着生ラン グラマトフィルム・キナバルエンセ (*Grammatophyllum kinabaruense* Ames & C.Schweinf.) の初開花について

磯部実・堀川大輔・島田有紀子

グラマトフィルム・キナバルエンセはボルネオ島サバ州キナバル山地域に自生する大型の着生ランである。2005年(平成17年)にラン専門業者より導入した本種がこのたび初開花したので報告する。

本種は著者が2002年(平成14年)5月にボルネオ島サバ州キナバル国立公園のラン園を訪問した時にちょうど開花しており、そのボリューム感に圧倒された。また2012年(平成24年)7月に再来訪し、公園内のフタバガキ科の樹林に設置されたキャノピーウォークで高木の樹冠の着生植物を観察している時に、高さ約30mの分枝場所に未開花ではあるが本種の大株が着生している自生の状態を身近に観察することができ、栽培の参考になった。

近縁種にはマレー半島に自生し、世界一大きくなるランとして有名でその花模様からタイガーオーキッドと呼ばれるグラマトフィルム・スペキオスム(*Grammatophyllum speciosum* Blume)があり、草姿は類似する。ちなみにグラマトフィルム・スペキオスムは本園では現在3個体を栽培しているが、1976年(昭和51年)の開園当初に導入した個体が、2005年(平成17年)に初開花している。残念ながら本個体はウイルス病に侵され、生育が衰えてその後の開花は見られていない。

本園のグラマトフィルム・キナバルエンセは導入当初の2005年(平成17年)には、偽球茎は約5本立て高さ約1mであった。栽培温室のミスト室(最低温度15°C)で年間を通して管理し、夏期にはガラス屋根上に約50%遮光材で日よけを行い、市販の発酵油粕固形肥料を施し、春と秋には液体肥料を施し、灌水は毎日与えた。

その後2018年(平成30年)5月に偽球茎が約20本になった株をリニューアルした大温室フラワーコーナーに移動・展示した。展示場所は大温室内の展示スペースが確保できる場所で、日当たりが良く、最低温度は15°Cであるが、冬季最も温度が高く推移し、溶岩壁に近いところなので保温効果は高く最適な環境であると思われた(夏季の日当りはこれまでより

強くなり、高温障害が心配されたので、2020年(令和2年)夏季に70%アルミ蒸着遮光ネットで遮光した)。また、近くに首振り式の扇風機を設置しているので、年間を通して適度に通風はあると思われる。水やりと肥料については栽培温室の時と同様の管理を継続して行った。

2020年(令和2年)5月上旬、偽球茎が25本になった株元(株張直径60cm)に3本の花芽が発生しているのが確認できた。5月15日に約100cm伸びた花茎に特徴的な花が咲き、グラマトフィルム・キナバルエンセであることが確認できた。その後3本の花茎は順調に伸び、次々と小花を総状に咲かせた。小花の自然開長幅(直径)は約8cmで、花弁・萼片の周辺は大きく波打ち、花色は黄色地に大小の茶褐色の斑がまんべんなく入り、全体的に茶褐色の花穂に見えた。花数は一番長く伸びた花茎(先端まで200cm)で35輪、中間のもの(150cm)で25輪、短いもの(100cm)で15輪であった(写真1、2)。一番長く伸びた花穂で先端まで花が咲ききったのは6月10日ごろ、開花終了したのは6月下旬で、約1ヶ月半の開花期間であった。

なお、「国内ではまれ。巨大で希少な着生ラン グラマトフィルム キナバルエンセ開花中」というタイトルでマスコミに情報提供したところ、中国新聞社の取材を受け、中国新聞2020年6月9日付け朝刊に「マレーシアのラン 広島市植物公園 国内2例目」と言う記事として掲載されたので、この花を目当てに来園した方が多かった。これまで日本国内の植物園においては国立科学博物館・筑波実験植物園で咲いた記録があるが、それ以外では開花の情報はない。

参考文献

- 濱谷修一・落合葉子・坂原治男 2006. 当園で初めて開花した植物 グラマトフィルム スペシオスム (*Grammatophyllum speciosum* Blume) . 広島市植物公園栽培記録27号:4
- J.J.Wood etc. 1994. The Plants of Mount Kinabaru 2. Orchid. Royal Botanical Garden Kew.
- Tomohisa Yukawa Akihiko Kinoshita and Nobuyuki Tanaka 2013. Molecular Identification Resolves Taxonomic Confusion in *Grammatophyllum speciosum* complex(Orchidaceae).Bull.Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. B. 39(3). 137-145



写真1 開花状況 2020年(令和2年)6月3日



写真2 花の拡大

令和2年(2020年)に初開花・初結実した大温室の植物とリニューアル時に新規導入した主な植物の開花・結実状況について

磯部実・堀川大輔

展示リニューアルされた大温室の植物は、そのほとんどが定植または移植3年目を迎え、これまで順調に活着・成長している。花や果実を着けるものが多くなり、ますます展示効果を高めているが、令和2年に初めて開花・結実したものがあるので記録する。

黄花イペー (*Handroanthus chrysotrichus*)

本個体は昭和54年(1979年)に寄贈された実生苗個体をバックヤードで鉢植えにして管理していたものである。平成28年(2016年)の大温室リニューアル工事に合わせて樹高2mの株を植栽し、令和2年4月に初開花した(写真1)。黄色い特徴的な花であることから本種であることが確定した。開花後ノウゼンカズラ科特有の細長い朔果を着けた。



写真1 黄花イペー

クリヌム2種

現在大温室には3種のハマユウ属が栽培・展示されている。春～秋には3種とも開花し、そのうちの後述の2種は初開花であった。

種不明個体(*Crinum sp.*)は長崎県亜熱帯植物園より導入し、大温室リニューアル時に定植したものである。花色や草姿はハマユウ(*Crinum asiaticum* var. *japonicum*)に似るが茎は2倍程度太く、葉は立性で草丈はより高いなどの点でハマユウとは別種考えられる。(写真2)。

クリヌム アウグスツム(*Crinum augustum*)は種